Ⅲ　遺　　物

出土した遺物のうち最も量の多いものは瓦類で、次いで土器類があり、他に少量の金属製品、石製品、木製品、鋳造関係遺物がある。

1．瓦磚

３次にわたる発掘調査で、調査区全域から瓦が出土した。まとまって出土したのは、瓦廃棄土坑であり、他に遺物包含層、条坊側溝などからも少量出土している。瓦類は軒丸瓦103点、軒平瓦198点、丸瓦11,945点（1,254.2kg）、平瓦40,218点（4,074.9kg）、道具瓦53点（内訳は、鬼瓦1点、隅切平瓦１点、熨斗瓦13点、面戸瓦６点、磚32点）である。他に刻印瓦が９点ある。

以下、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、鬼瓦、熨斗瓦、面戸瓦、刻印瓦、朱付き軒平瓦の順に解説し、最後にまとめを述べる（tab.１、fig.13～15、PL.６・７）。

軒丸瓦　**6012Ａｂ**：重圏文軒丸瓦。6012Ａａの中央の珠点、および圏線を太く、深く彫り直したもの。瓦当面から約１cmに笵端痕跡の段を残す。裏面に布目を残す。丸瓦先端部の剝離した部分にも布目が連続しており、布目は丸瓦接合前についていたことがわかる。接合粘土はごく少量で、裏面接合部の下側には粘土を補足する前につけられた円弧状の浅く狭い溝状のあたりがある。丸瓦接合時になでたものか。瓦当側面および裏面下半周縁はヘラ削り調整。胎土に砂を少量含む。色調は内部が灰白色、外面が灰黒色を呈し焼成はやや軟質。図はＳＤ110上層出土品。**6125Ａ**：瓦当裏面は縦方向のナデ（幅広で深い）で調整する。図はＳＤ110上層出土品。**6225Ａ**：瓦当裏面から丸瓦凹面にかけて幅広で深い縦方向のヘラ削り調整。「積み上げ技法」による。砂粒を多量に含む。図はＳＫ795出土品。**6227Ｄ**：6225に比べ弁は平板な表現。瓦当裏面は上に向って薄くなる。多量の砂粒を含み、赤～灰褐色、軟質の焼成。図はＳＤ110上層出土品。本型式は京内で目立つ型式。**6235Ｃ**：瓦当裏面を縦方向にえぐるように削る。砂粒を多量に含む。表面が黒灰色、内部は灰色で、軟質の焼成。図はＳＫ842出土品。**6235Ｉ**：小片で第306次調査区の灰茶砂質土などから出土。**6236Ｆ**：子葉がくぼんで表現される。図はＳＫ770出土品。**6237Ａ**：図はＳＫ728出土品。**6273Ｂ**：外縁に凸鋸歯文をめぐらす藤原宮式。

tab.1　軒瓦 一覧

調査区 / 軒丸瓦	北面回廊・金堂（第299次）	金堂・中門北（第306次）	中門・南門（第309次）	点数	調査区 / 軒平瓦	北面回廊・金堂（第299次）	金堂・中門北（第306次）	中門・南門（第309次）	点数
6012Ab			1	1	6641C			1	1
6125A		2		2	6647B			1	1
6225A			1	1	6663Cb		2		2
6225?		1		1	6664C		1		1
6227D		1		1	6664I		1		1
6235C		5	13	18	6668A		5		5
6235I		3	3	6	6681A		1		1
6235?		8		8	6691A			2	2
6236F		9		9	6710A		1		1
6237A	1			1	6719A		1		1
6273B		1		1	6721C		1		1
6282Ha	1			1	6721E			1	1
6282?	1		1	2	6721?		1		1
6284Ea		1		1	6739A			2	2
6314B			1	1	6761A	10	14	14	38
6348A		1		1	6764A	3	12	1	16
不　明	6	33	9	48	6775A		6	2	8
					不　明	22	65	28	115
軒丸瓦計	9	65	29	103	軒平瓦計	35	111	52	198

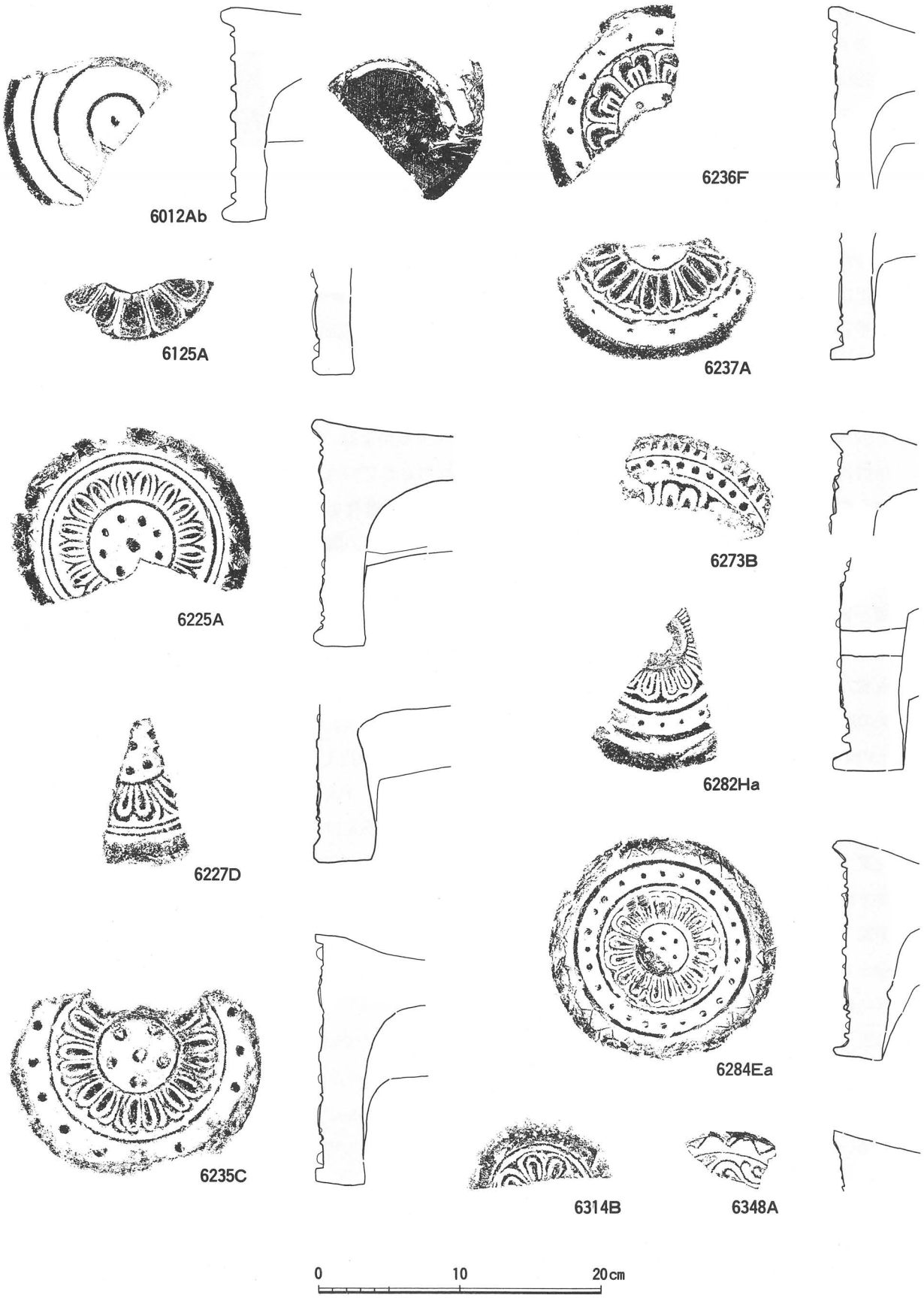


fig.13　軒丸瓦拓本・実測図　1:4

瓦当面から１cmの位置に笵端痕跡を残す。裏面、接合部に指頭圧痕が深く残る。胎土に白色の砂粒を含み、灰青色を呈し、硬質の焼成。図は第306次調査区の遺物包含層出土品。**6282Ｈａ**：瓦当裏面表面は剝離。中房中央に孔（直径約２cm）をもつ。孔は焼成後の穿孔。垂木先瓦として使用されたか。図はＳＤ095上層出土品。**6284Ｅａ**：瓦当部ほぼ完形。笵の抜けがシャープ。丸瓦の取り付け位置は低く、丸瓦との接合部を深くえぐる。外面は黒灰色、内部灰白色、胎土には砂をほとんど含まない。遺存状態が良好である。図はＳＤ110上層出土品。**6314Ｂ**：小型の軒丸瓦。周縁が摩耗している。丸瓦部の取り付け位置は低い。図はＳＤ110下層出土品。**6348Ａ**：外区内縁に唐草文をめぐらす。中房部分が残っておらずａ、ｂ、ｃのいずれであるかは不明。周縁端部をヘラ削りで面取り風に調整する。胎土は緻密で、灰青色、硬質の焼成。図は第306次調査区の後世の耕作溝出土品。

軒平瓦　**6641Ｃ**：図示したＳＤ110上層出土の１点のみ。**6647Ｂ**：変形忍冬唐草文で、藤原宮式。図は第309次調査区西区の遺物包含層出土品。**6663Ｃｂ**：図はＳＫ770出土品。**6664Ｃ**：図はＳＤ110上層出土品。**6664Ｉ**：この型式は通例、貼付段顎であるが、本例は削り出しの段顎である。瓦当面と平瓦部との角度が大きく鈍角をなす特徴もある。図はＳＤ110上層出土品。**6668Ａ**：図(右)は唐草文左第１単位付近に縦方向の大きな笵割痕がある。ＳＸ760に転用されていたもの。図(左)の平瓦部凸面は、縦縄叩きで、顎から５cm幅でヨコナデする。第306次調査区の遺物包含層出土品。**6681Ａ**：焼成軟質。図はＳＤ110上層出土品。**6691Ａ**：唐草文第４単位と第１支葉との間の２箇所に彫り込みがある。図は第309次調査区の遺物包含層出土品。**6710Ａ**：上外区、下外区に「×」を彫り込む。左第１単位主葉と第３単位主葉に笵傷が認められる。左第３単位のそれは、左脇区界線にとどまり、上界線までは達してはいない。図はＳＫ770出土品。**6719Ａ**：短い段顎で、平瓦部凸面は縦縄叩き。胎土に砂粒を多量に含み、灰褐色、硬質の焼成。図は第306次調査調査区の後世の耕作溝出土品。**6721Ｃ**：図は第306次調査区遺物包含層出土品。**6721Ｅ**：図はＳＥ835井戸枠抜取穴上層出土品。**6739Ａ**：第306次調査区の遺物包含層出土品。**6761Ａ**：ほぼ完形の軒平瓦。図はＳＫ843出土品。**6764Ａ**：図はＳＫ727出土品。**6775Ａ**：曲線顎。微細な砂粒を多量に含み、灰色、堅緻な焼成。平瓦部凹凸両面に表面が剝がれた痕跡があり、焼成時か、あるいは凍結などによる剝がれか。図はＳＫ770出土品。

丸瓦　殆どが小破片となっており、全形の分かる資料は少ない。図示した丸瓦は全長34.8cm、広端外径が17.0cm、凹面には布目を残し、凸面には縦縄叩きの後広くすり消す。ＳＫ770出土品。

平瓦　図示した平瓦は全長38.8cm、狭端長が25.2cm、広端は復元長約29cmである。凹面の布目は両側縁から２cm前後入った部分までで、一枚作りの痕跡を示す。凸面は縦縄叩きで、狭端から約10cmの部分に調整の指圧痕が並列する。第306次調査区の遺物包含層出土品。

鬼瓦　鬼面文鬼瓦の目玉部分の小片が１点ある。型式は不明。第309次調査区西区の遺物包含層出土。

熨斗瓦　平瓦凹面に浅い沈線（分割線）を入れて分割しているものが４点出土した。分割線は幅0.1cm、深さが0.2～0.3cm前後のものが多い。熨斗瓦の幅に関しては12.5cmとわかるものが１例ある。他の３点はいずれも小片で、分割線を残したままのものであり、平瓦として用いられたものか、あるいは別の位置で割って熨斗瓦として使用したものか判別困難なものである。以上は第309次調査区の西区遺物包含層からの出土品である。この他、焼成後に平瓦を打ち欠いて熨斗瓦に使用したものの存在も想定されるが、確実に認定できるものはなかった。

面戸瓦　丸瓦を焼成前に分割し、台形に調整したものが６点出土した。全形のわかるものはない。ＳＫ706から１点、ＳＫ770から２点、他は後世の耕作溝からの出土品である。丸瓦を焼成後に打ち欠い

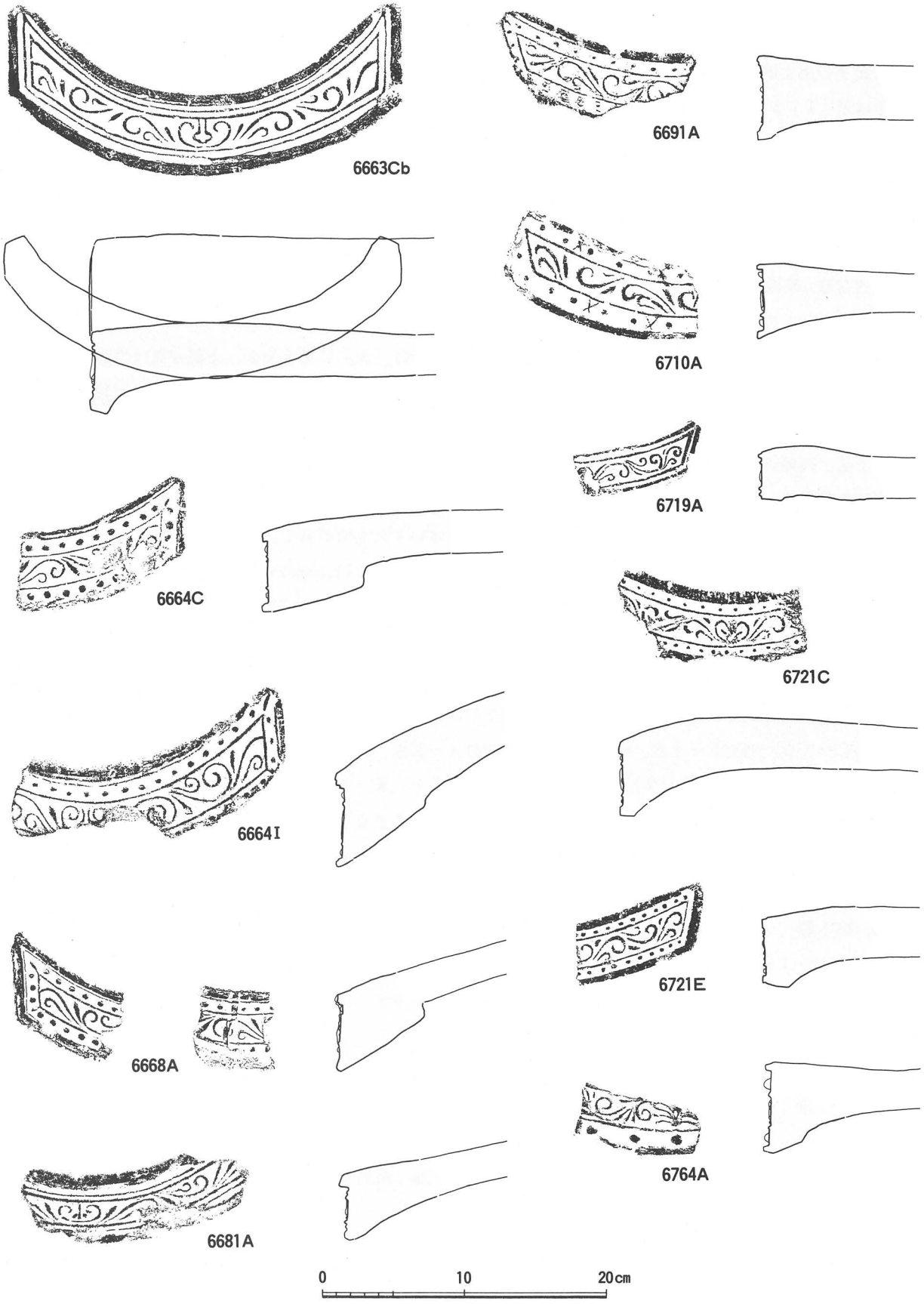


fig.14　軒平瓦拓本・実測図　1:4

てつくったものについては確実に認定できるものは無かった。

刻印瓦　**A**：平瓦凹面に「上」の左右逆字が印されたもの。SK700出土品。西隆寺では、これまで「上」の正字の出土例はあるが、逆字は初例。**B**：平瓦凹面に印されたもので、上下２文字あり、上は不明、下は逆「T」字状を呈する。SK841出土。同一原体によるものが、これまで東門地区から３点、中門・南門地区から１点出土している（『報告1976』、『報告書1993』）。上の文字は「雇カ」と釈読してきているが検討を要する。この他、SK841から逆「T」らしき文字を印した小片が出土している。**C**：平瓦凹面に「理」の文字が印されたもの。第306次調査区の整地土（灰茶砂質土）から出土。スタンプは縦1.6cm、横1.9cm、のやや横長の方形。「理」はこの他、SK770および第309次調査区の遺物包含層（茶褐土）からも各１点出土している。**D**：平瓦凹面に、縦に文字を印したもの。上から「上」、「木」、「工」、の組み合わせ文字か。さらに「工」の下に縦画がのびており、「丁」か。SX750据付け掘形出土品。**E**：平瓦端面にスタンプされたもの。現状では「大」に見えるが、上部が欠けており、過去の出土例を参照すると「矢」である可能性が高い。第309次調査区の遺物包含層出土品。「矢」とすれば西隆寺では初例。**F**：平瓦端面に「目」の文字が印されたもの。第306次調査区の遺物包含層出土品。西隆寺では初例。

朱付き軒平瓦　軒平瓦凸面の瓦当寄りに、瓦当面と併行して朱線の見られるものがある。茅負に塗布した顔料が付着したものである。型式の判明するものはいずれも6761Aで、朱線の位置は瓦当面から11.0cmのものが３例あり、そのうち１例を写真に掲げた。他に、11.5cmのものが１例ある。他の２例は、瓦当部が剝落しており、朱線は、平瓦部狭端から約26cmと約27cmの位置にある。形態、製作技法、胎土などの特徴は6761Aと共通する。

まとめ　西隆寺関係の瓦で、まとまって出土したのは、瓦廃棄土坑である。軒瓦について集計すると、6235C－５点、6236F－１点、6237A－１点、6761A－20点、6764A－３点、6775A－１点、6710A－１点となる。軒瓦編年（『平城報告XⅢ』）にしたがうと、Ⅲ－２期：6710A、Ⅳ－２期：6235C、6236F、6761A、6764A、6775A、Ⅴ期～平安初め：6237Aとなる。西隆寺造営に先行する6710Aを除けば、創建時の6235Cと6761Aが主体を占め、若干時期の遅れる瓦が少量混じる状況である。さらに、個々の建物の所用瓦の推定の手がかりとして廃棄土坑の位置をみると、金堂に近接するSK697他（第１群）、中門位置に近接するSK770（第２群）、南門位置に近接するSK842・843（第３群）の３群に分けることができる。第１群では6237A、6761A、6764A、第２群では6236F、6761A、第３群では6235C、6761Aが主体を占め、それぞれ近接する金堂、中門・回廊、南門の所用瓦と推定できる。

西隆寺造営以前の瓦を軒瓦編年にしたがって、分類すると以下のようになる。

Ⅰ－１期：6284Ea、6273B、6647C、6641C、6641I、6647B、6668A、Ⅰ－２期：6348A、6664I、Ⅱ－１期：6314B、6681A、Ⅱ－２期：6012Ab、6282Ha、6719A、Ⅱ～Ⅳ－１期：6691A、Ⅱ－２～Ⅲ－１期：6225C、6663Cb、Ⅲ－１～２期：6721E、Ⅲ－２期：6710A、6721C、Ⅳ－１期：6227D

このように時期的には平城遷都当初から、西隆寺造営直前の時期までのものがあり、条坊道路側溝、井戸抜取穴、土坑、遺物包含層などから散在して出土している。西隆寺造営以前には瓦を葺いた遺構を見出す事は出来ず、これらの瓦の使用状況は不明とせざるを得ない。

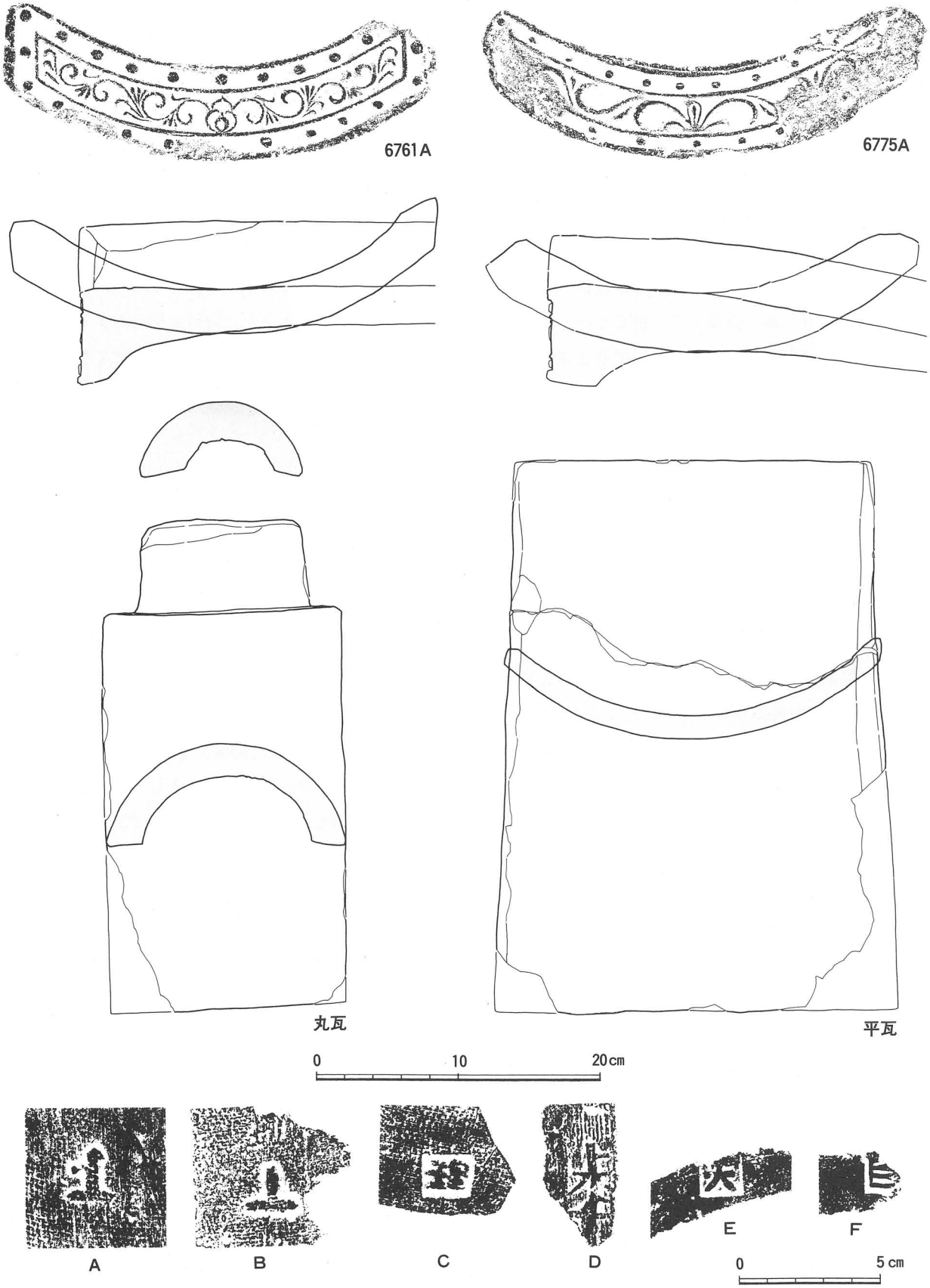


fig.15　軒平瓦・丸瓦・平瓦・刻印瓦拓本、実測図　1:4、1:2

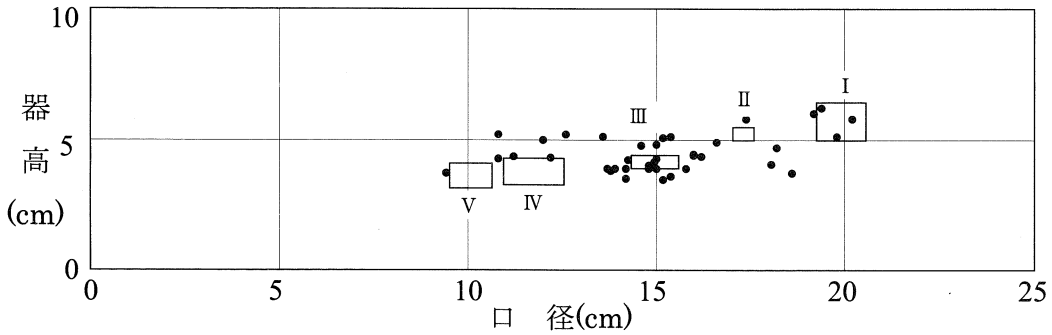
2．土器・土製品

3次にわたる調査で出土した土器・土製品は整理用コンテナにして総数約60箱分に相当する。大半が古代の遺物であるが、それ以外にも弥生土器、古墳時代の土師器、須恵器および埴輪などが古代の遺構の上下から出土している。他方、西隆寺造営以後の遺物はほとんど出土しておらず、大規模な後世の削平があったものと考えられる。また、古代の資料に関しても、西隆寺の廃絶時期を決定付ける良好な証拠を得ることはできなかった。

以下では、条坊側溝出土の土師器、須恵器を中心に詳述する。それ以外の遺構では、土坑や井戸からの出土も少なくないが、溝と重複するものは溝内の資料を拾っている可能性も捨てきれず、いずれも平城Ⅳ以前と言及するに留めたい。また、遺物包含層や整地土より出土した資料も相当数あるが、調査時の所見で整地土ないし遺物包含層として認識された土層には、接合や編年的検討を経ても側溝出土のものと明確に区別できない資料を含むものがある。特にSD110を覆う暗茶褐色土では、溝の直上のみ大量に土器が出土しており、下層の溝埋土土器とも一部接合関係にあることがわかった。したがって、この資料については、溝の上層資料として扱っていることを付言しておく。

SD110（fig.16－1～33、PL.8）　土師器には杯A・B・C・E、皿A・C、椀A・C、杯B蓋、鉢A・X、高杯、盤、壺A・B、甕、甑、竈、製塩土器など、須恵器には杯A・B・C・E、皿A・B・E、椀A、杯B蓋・皿B蓋、鉢A・D・E、盤、壺A・B・C・K・X、平瓶、甕などの器種が確認できる。なお、図化したものは大半が下層埋土出土の資料である。まず、須恵器杯A・Bの法量分布を検討したい。出土量の多い杯Bに注目すると（tab.2）、口径からⅠ(17)、Ⅱ(18・19)、Ⅲ(20・21)、Ⅳ(22)、Ⅴ(23)の5群が存在しており、比較的口径の大きいⅡ～Ⅲ群では器高の高い一群と低い一群があるようである。『平城報告Ⅶ』を参考にすると、その分布は平城ⅢのSK820の様相と類似することが指摘できる。資料数が少ないながら、杯A(12～16)についても同様の検討をおこなった結果、やはりSK820に近い様相が指摘できた。このことは、土師器杯、皿類にみる暗文の特徴や調整手法、そして椀Aの一定量の存在などとともに、これらの一群がSK820と併行する時期のものであることを示している。なお、SD110上層埋土（暗茶褐色土）の資料は、土師器にc手法の比率がより多く見られること、須恵器杯B蓋の形態が端部付近で短く屈曲する新しい形態が目立つことなどから、下層に比べて平城Ⅳの様相が強まっていることが指摘できる。すなわち、SD110埋没以後、ほどなくして西隆寺が築かれたと思われるが、下層と上層との間に断絶はないものと思われる。この他注目される遺物として、「洗」状の器形の土師器(8)が1点、いわゆるロクロ土師器(10)が1点、「美濃」のヘラ描きをもつ須恵器(27)などが出土している。

tab.2　SD110出土須恵器杯Bの法量分布図（枠は『平城報告Ⅶ』のSK820）



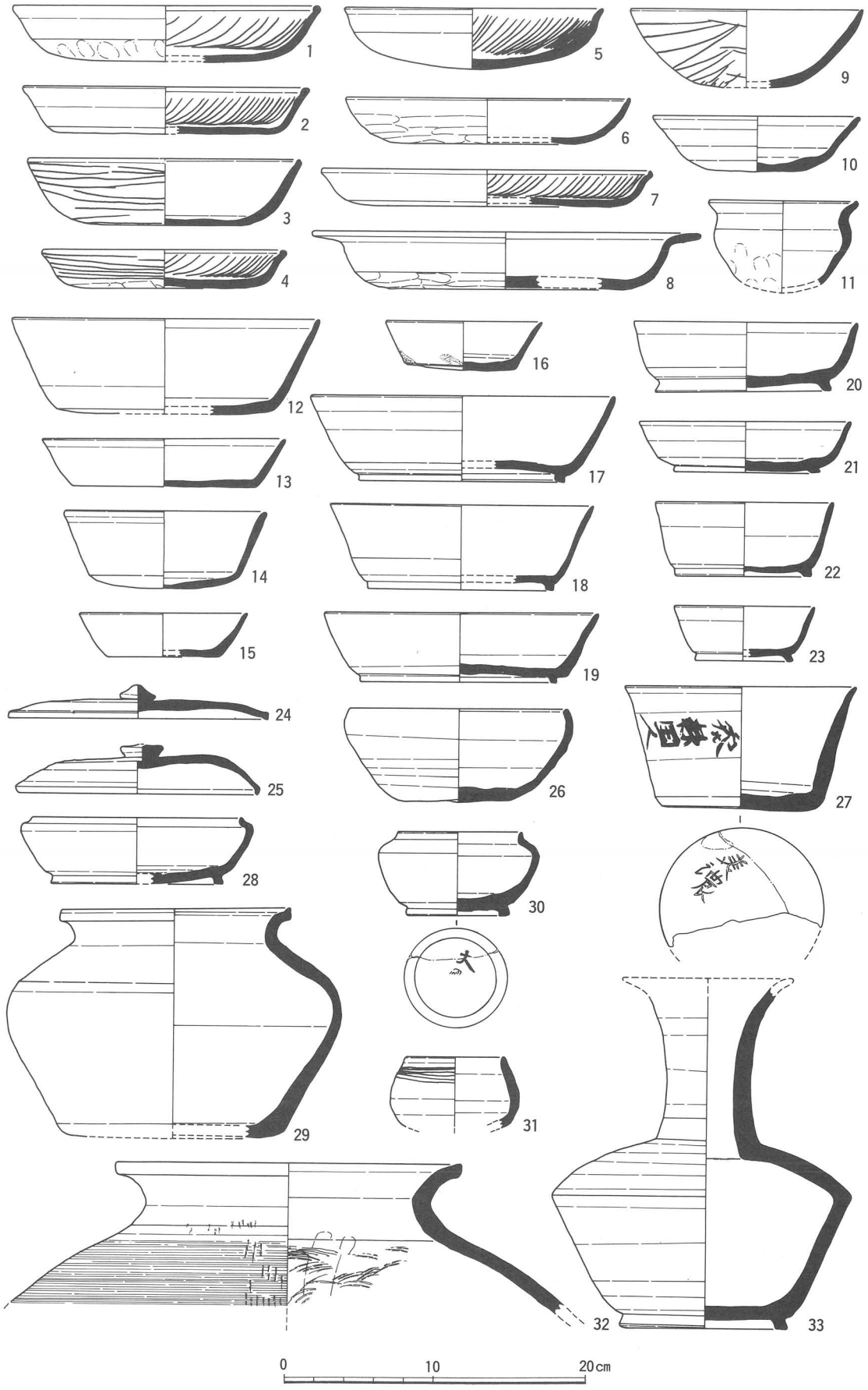


fig.16　SD110出土土器実測図　1:4

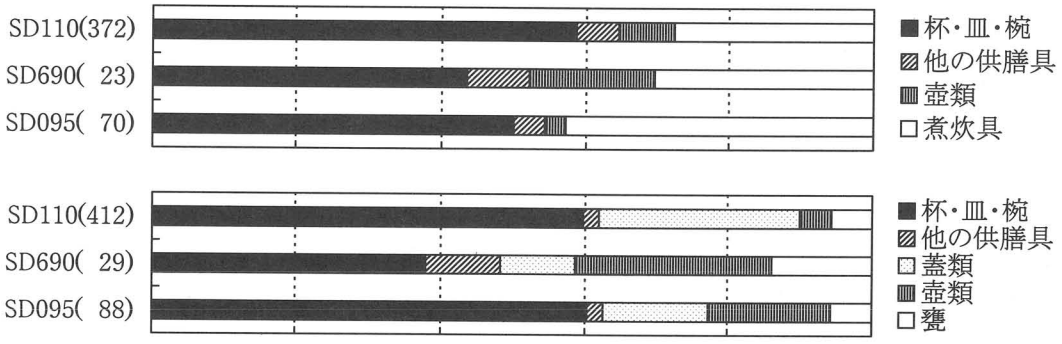
SD690（fig.17－34～51、PL.8）　他の条坊側溝と比べ、出土総数は少ないが、土師器甕、須恵器壺類といったやや大型の個体の残存率が高く、土師器杯Aがきわめて少ない傾向が指摘できる。土師器には杯A・B・C・E、皿A・C、椀C、杯B蓋、鉢B、高杯、壺A・B、甕A・C、甑、竈、須恵器には杯A・B・C・E、皿A・B・E、椀A、杯B蓋、皿B蓋、鉢A、盤、壺A、平瓶、甕がある。土師器杯Aに連弧暗文が確認できること、土師器の調整手法にa手法が目立つこと、そして椀Aが見られないことから、奈良時代前半の様相が強い。個別資料としては49の壺は体部中心に口縁の付かないもので、他にあまり例をみない。なお、40は播磨産とおもわれる精製品で重量感がある。

SD095（fig.18－52～61・63、PL.8）　SD690と坪の北西隅で合流することから、両者の内容の比較は興味深い。土師器には杯A・B・C・E、皿A、椀C、杯B蓋、鉢B、高杯、盤、壺A・B、甕A・C、甑、竈があり、須恵器には杯A・B・E、皿A、椀B、皿B蓋、鉢A、盤、壺K・Q、平瓶、甕A・Bなどが確認できる。図は一部上層の資料(52など)を含むが下層資料が中心である。杯E(55)や杯A(56)の外面にヘラミガキが施された須恵器が存在しており、前述の40との類似が指摘できる。また、大型の杯B(59)は平城ⅡのSD485や平城Ⅲの古段階であるSD5100などにある杯BⅠ－1に相応するもので、総じてSD110の資料に比べ、編年的に古い様相をうかがわせる。SD690との合流は両側溝から出土した古墳時代後期の高杯の破片が接合したことからも明らかで、下層埋土の内容の類似もそのことに起因すると思われる。すなわち、坪の北西隅をはさんだ両側溝の少なくとも下層は、平城Ⅱ～Ⅲの古段階のうちに埋まってしまっていることが推察できるのである。

以上見てきたように、坊間西小路をはさんで、東西の側溝に見られる内容が異なることは、各坪の利用形態の差によるものと考えられる。おそらく、東側溝は排水溝としては、いち早く機能しなくなり、主として西側溝がその機能を担ったのであろう。また、製塩土器(65・66)がほぼSD110に限って出土しており、鍛冶関連の遺物が同様の集中を見せることから、西側が工房などに関わる区画であったことを示唆するものであろう。この製塩土器は内面に布目や刷毛目を残さない砲弾形のもので、紀淡海峡付近が産地と考えられる。この他、調査区全体では土馬が30点前後、蹄脚硯が1点、細長い瓶形の青磁底部片(62)が1点、三彩の破片が3点、獣脚壺(64)などが出土している。

さて、上記3側溝資料に対して、定量分析を通した比較を試みた（tab.3）。用いた方法は、原則として土師器、須恵器のいずれも口縁部の残存率が8分の1以上のものを1点と数えた。土師器と須恵器の比率はおおむね1：1で、平城宮内の全体的傾向に一致する。器種構成を比較した結果、資料数に偏りがあるもののSD690には須恵器貯蔵具が多く、個体の残存率が大きいこととあわせて注目される。なお、前述の時期差は器種構成の違いとなって現れていない。

tab.3　土師器(上)と須恵器(下)の器種構成(括弧内は資料数)



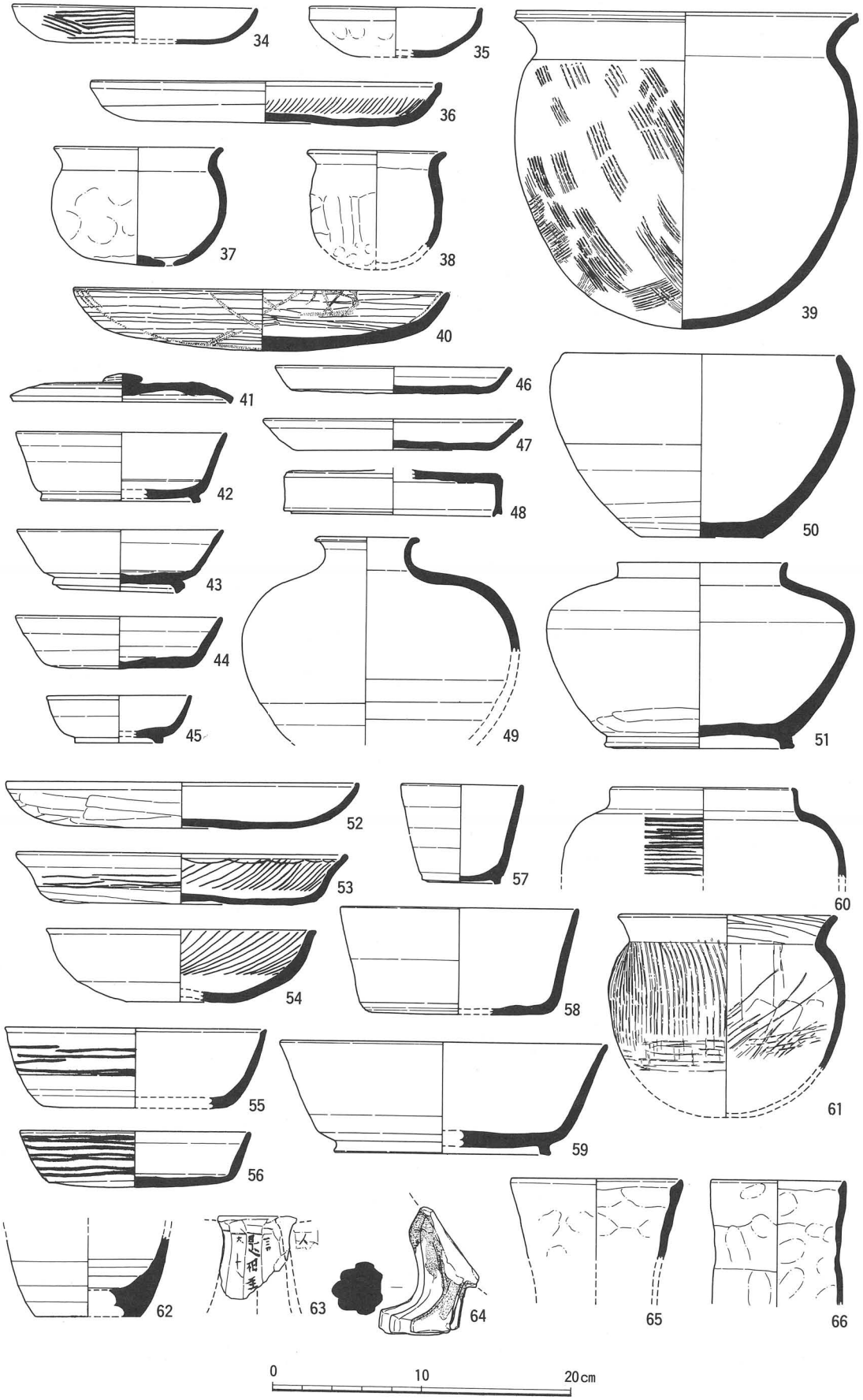


fig.17　SD690(34～51)・SD095(52～61・63)他出土土器実測図　1:4

3．木製品・金属製品その他

木製品　曲物の底板片、燃えさし、加工棒などがある（fig.19、PL．9）。1は曲物底板の断片。長さ10.3cm、幅2.2cm、厚さ4mm。ヒノキの板目板を用いており、側縁に釘孔をもつ。推定径14.2cm。SE835抜取穴最下層出土。

金属製品　銀、銅、鉄、鉛等の製品・素材がある（fig.19、PL．9）。2は銀製帯先金具。頂部中央に対葉花文を、基部左右に栓形花を配した花唐草を透かし、裏面に3本の鋲足をもつ表金具である。長さ1.81cm、幅1.64cm、厚さは頂部0.36cm・基部0.15cm、ほぼ純銀製で2.8g。SD095上層出土。「衣服令」によれば、一品以下、五位以上の朝服として金銀装の腰帯、武官の礼服・朝服として衛府の督・佐に金銀装の腰帯とともに金銀装横刀の佩用が許されていたことが知られる。本例では裏面の形状から推定される帯の幅が1.5cm程とかなり細いことから、腰帯よりもむしろ佩具、あるいは刀子を含めた刀装や馬装などの用途が想定される。たとえば刀装としては、東大寺大仏殿鎮壇具金銅荘大刀とともに出土した小型の帯先金具（紐先金具）がある。帯執緯の先金具になろうか（上田三平「東大寺大佛殿須彌壇内に於て發見せる遺寶に就て」『寧楽』8号1927、帝室博物館『天平地寶』1937）。また、鎬の形状等に本例との差異はあるものの、正倉院北倉金銀鈿荘唐大刀、あるいは中倉の刀子鞘装具などに唐草文をモチーフとした銀（鍍金）透金具の多用をみることができる。

3は銀製細板。長さ6.5cm、幅3.7mm、厚さ1.5mm、3.62g。一端は鏨により切断されている。SX836の東に取り付く塀の柱穴柱痕跡出土。

4は経軸頭金具。頂部径19mmの円筒形で、現存高20mm。厚さ約1mmの銅板に鍍金をおこない、頂部上面および側面には、線彫りにより花文を表現した後に魚子をその周囲と中房部分に打つ。魚子は、径1mm弱で正円ではなく半円になるものが多く、重複も目立ち不揃いである。遺物包含層出土。5は銅製瓔珞。銅鋺の口縁部を転用したもので、本来は口唇部を一方の長辺とし、長さ40mm、幅17mmの長方形に加工されていたものと推定されるが上半1/3を欠く。上端から約1cmの位置に、径3.0mmの円孔を穿つ。本来の銅鋺は、推定口径21cm以下、口縁部は断面三角形状に内側に肥厚する。SD095内の小穴SX695出土。6は海獣葡萄鏡。小型海獣葡萄鏡の内区のみを独立させたもので、径3.7～3.8cm。わずかに楕円になる。鈕の周囲に四禽獣を配し葡萄唐草がそれを取り巻くが、文様は不鮮明である。SE740枠内最上層から単独で出土。7・8は銙帯金具で丸鞆表金具および鉈尾表金具。いずれも表面にわずかではあるが漆が遺存する。ともにSD110出土。

9は鉄斧。有袋斧でわずかに肩をつくる。長さ4.9cm、刃部幅3.5cm。袋部の横断面形は方形を呈し、左右の折り返しは合わせ目が「ハ」字状に開く。SD110上層出土。10は小型の鉄製U字形鍬・鋤先。刃部は強い曲線を描き内側に溝をつくる。左右の耳端部を欠くが推定刃部幅5cm程度。SD095出土。鉄製品にはこの他に釘をはじめとする多数の断片がある。11は鉛塊。皿形を呈し、一端が舌状になる。132.18g。整地土出土。12は銅製の笄。平城京以後のものであろう。遺物包含層出土。

銭　貨　和同開珎1点がある（PL．9）。劣化が著しく細片化している。「開」の門構えは隷書風につくる。SE835抜取穴上層出土。

石器・石製品　奈良時代以前のものにサヌカイト製の石鏃、剝片、石核がある（fig.20、PL．9）。13は両面加工の無茎鏃。凹基で側縁が直線状をなす。遺物包含層出土。14はSE835掘形、15はSE740裏込め出土。奈良時代以降のものには、六角小塔の屋蓋・基座、砥石などがある（fig.20、PL．

9・10)。16は六角小塔の屋蓋。２点の破片が接合する。１辺が約6.1cmの六角形で1/2を欠く。石材は花崗岩で雲母片を多量に含む。上面には降棟を、下面には４段に垂木・斗栱を表現する。棟先には下面から、径1.2mm、深さ約4.5mmの小孔を１孔ずつ穿つ。破断面で観察するかぎり孔径は一定で、中心に向かってわずかに傾斜する。おそらく風鐸あるいは瓔珞状のものが装着されていたのであろう。17は基座。平面が１辺7.9cmの正六角形、厚さ1.9cmの板石で約1/2を欠く。全体の風化が著しく判別が困難であるが、石材は花崗岩系の可能性がある。上下の面で状態が異なり、丁寧に研磨されている面が上面、研磨が認められず荒い状態の面が下面と考えられる。側面は上面と同様である。下面には一定方向の線条痕がみられる。中心からわずかにずれた位置に径５mm程の貫通孔がある。後述する正倉院三彩塔の基座を参考にすると、心柱を支えるための孔であろう。屋蓋・基座ともに、金堂南面の遺物包含層出土。こうした六角小塔の遺品には、石製品に正倉院南倉白石塔残欠、陶製品に同三彩塔(磁塔)、平城宮馬寮東方地区出土黄釉屋蓋がある。正倉院三彩塔の基座は、１辺7.7cm、長径15.3cm、短径13.4cm、厚さ1.7cmとされ（楢崎彰一「三彩塔」『国華』982号 1975)、西隆寺出土の石製基座とほぼ同形同大であることは注意してよい。

砥石は総数21点出土した。18～28は方柱状・梯形状を呈するのもので、石材は流紋岩・石英斑岩系。27はバチ形を呈する長さ14.8cmの大型品で５面を使用する。ＳＥ740埋土出土。28は一端に径７mmの孔をもつ提げ砥石である。孔をさかいに浅い段がつく。ＳＤ110出土。また18・26では、小口に１mm間隔の平行する条線が観察される。

29～31は大きな凹面を有するもので29・30は砂岩系、31は片麻岩系の石材を用いる。32は丸棒状のもので片岩系。33は灯籠据付穴ＳＸ750の北辺から出土した厚さ4.8cmの板石断片。溶結凝灰岩系。節理面に擦痕を残すが出土状況や石材などから本来は基壇化粧などの建築材料であった可能性もある。出土砥石には形態と石材との対応関係が認められ、この構成は右京八条一坊十三・十四坪など従来平城京内においてみられたありかたに近い。

この他にＳＤ110上層より水晶片が出土している。

鋳造・鍛冶関係遺物　鞴羽口は７点出土した。34・35は、外径５cm前後、内径2.4cmのもの。外面は面とり状の凹面が連続する。ともにＳＤ110出土。36は内径2.5cmで前者とほぼ同様であるが外径が6.8cmと一回り大きい。外面には長軸方向に10条前後の凹線状の圧痕がみられる。ＳＤ110出土。

鉱滓は小片も含め32点、計2,364.65ｇ出土した。

鞴羽口および鉱滓の平面分布をfig.18に示した。両者はともに第309次調査区に集中し、なかでも西二坊坊間西小路西側溝ＳＤ110の範囲に数多く認められる。このことは、西隆寺造営以前の十五坪に、金属器製作に関わる何らかの施設の存在したことを示唆しているといえよう。

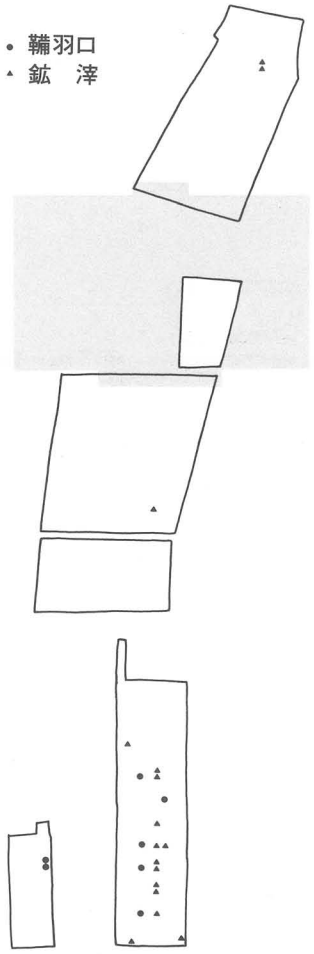


fig.18　鋳造・鍛冶関係遺物分布図

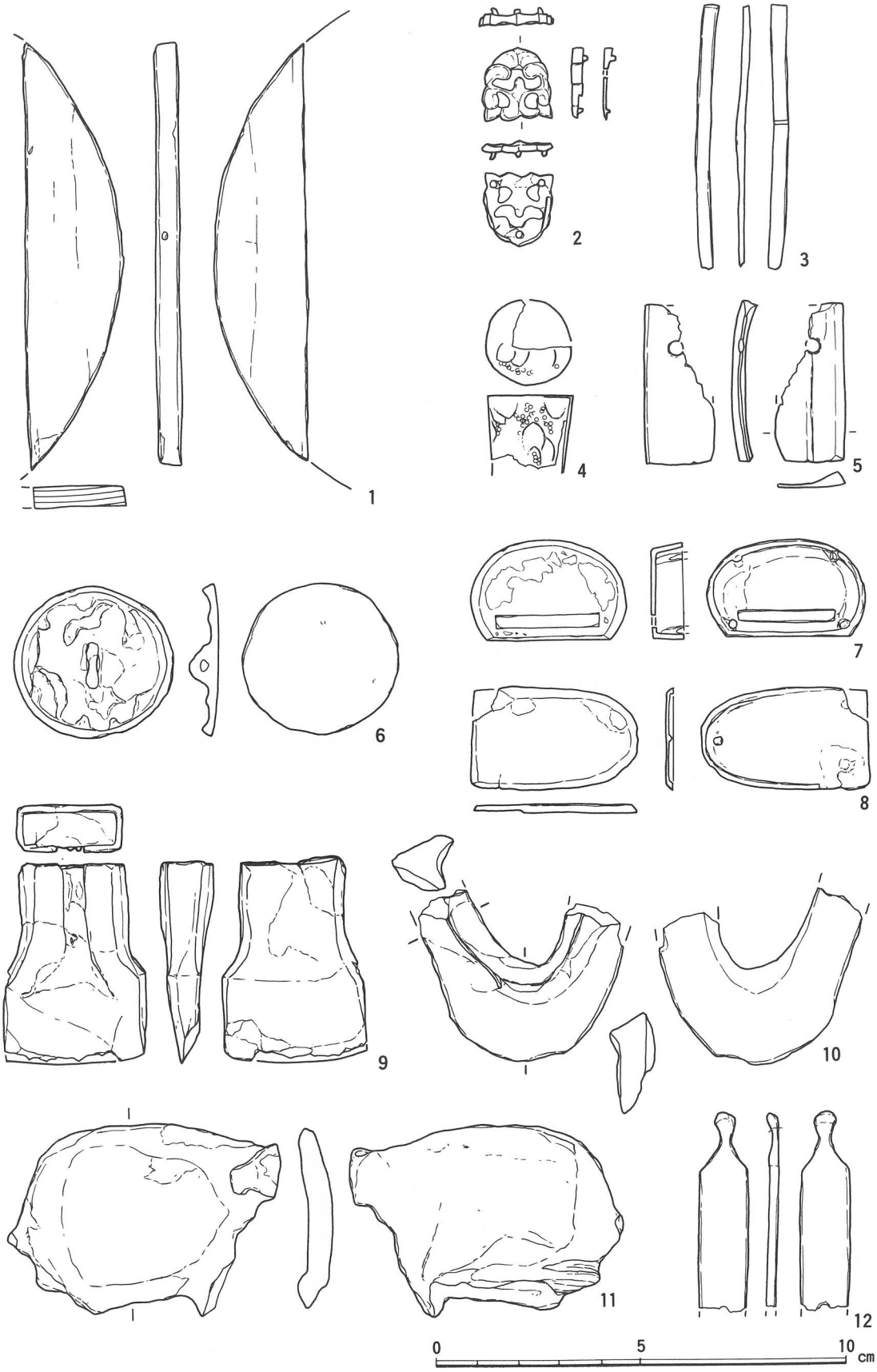


fig.19　木製品・金属製品実測品　2:3

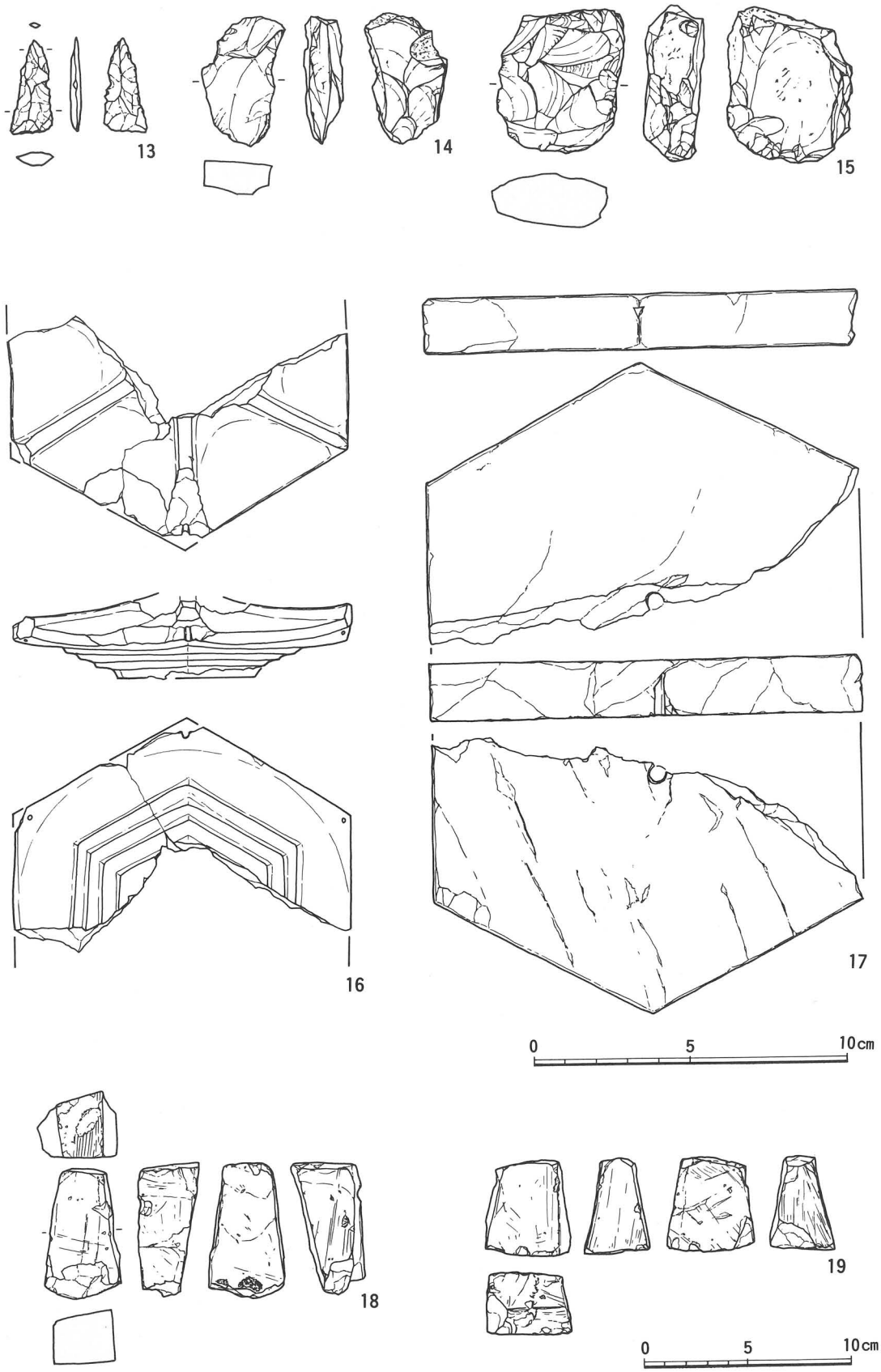


fig.20　石器・石製品実測図　1:2, 1:3

fig.21　石製品実測図　1:3

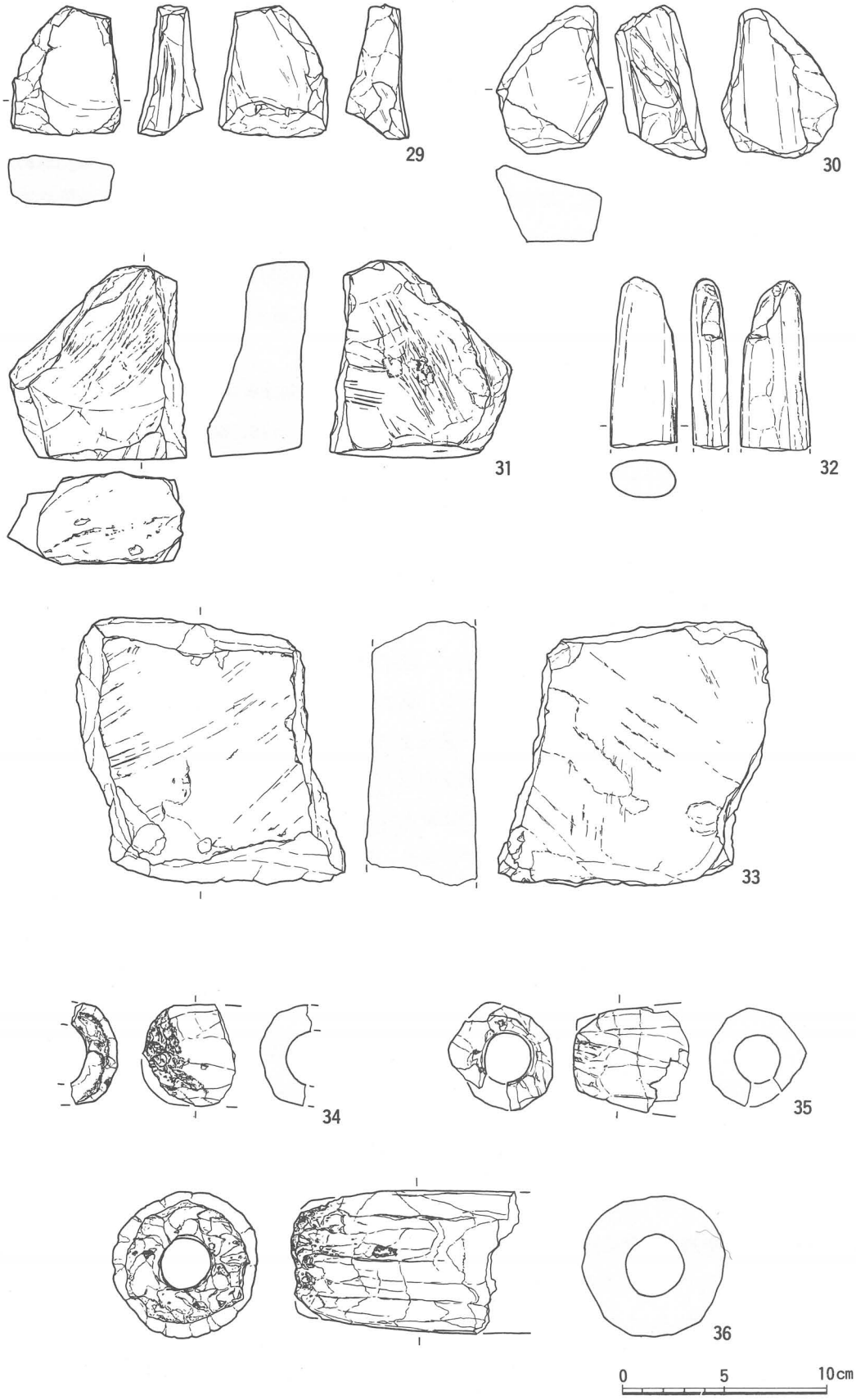


fig.22　石製品、鋳造・鍛冶関係遺物実測図　1:2